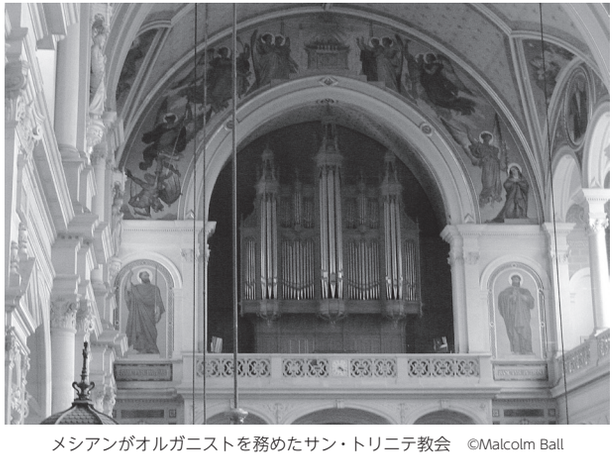
メシアンの人生とカトリシズム

──「若きフランス」の自己決定 ──

長木誠司



メシアンがオルガニストを務めたサン・トリニテ教会　©Malcolm Ball

読響は2017年11月に、創立55周年の一大プロジェクトとして、メシアン（1908～92）唯一の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉に常任指揮者カンブルランと挑みます（演奏会形式・全曲日本初演）。本公演に向けて、本誌ではメシアンに関する特集を「アッシジへの道」として連載します。第2回の今回は、メシアンの人生・音楽に多大な影響を与えた「カトリシズム」について紹介します。（編集部）

宗教と音楽

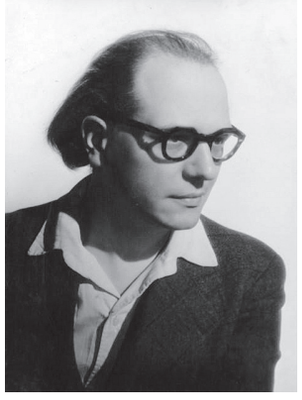
メシアンの創作全体に通底する大きな要素がカトリシズムであるが、日本のようにカトリシズムの伝統を持たない国でもメシアンの音楽が人気を誇る背景には、そうしたカトリシズムの要素が、メシアンという作曲家の作品を聴く場合に必須とは限らないということを示してもいる。作曲者の意図とは別の、もっと自由な視点から作品を聴くことができるというのは、すでに日常の通念として、あるいはたとえ美学的に論を展開したとしても、いまさら確認するまでもないことだろう。けれども、「自己表現」をモットーにした典型であるヨーロッパ近代型の音楽においてもそれが成立するというのは、やはりモダン以後の時代、つまりはグローバルな現在がようやくひとびとに与えた確信だろうと思う。

しかしながら、そうしたモダンを通り越した現代は、歴史上かつてないほど宗教の存在自体が疎ましくも疑問視される時代でもある。信仰、ことに他の神を認めない一神教へのそれは、世界的な規模で軋轢（あつれき）、摩擦、不寛容、そして対立、殺戮（さつりく）、戦争といった事態を招き込んでしまい、すでに全世界がそれを痛感している。異なる宗教同士、原理主義同士の対立がグローバルに顕在化しているが、もちろん、キリスト教内部でもかつては異端審問の名の下に、あるいは新旧対立の下に、多くの殺戮や宗教戦争が生じていた。宗教がけっして幸福や利益だけを与えるわけではないということは、すでに人類全体の実感でもあろう。そうした時代に、「メシアンの音楽はカトリシズムへの強く深い信仰を読み込んだもので……」と呑気（のんき）に解説すること自体が身震いするほどおぞましくも感じられる。

非宗教音楽としてのメシアン

信仰するままに、それを（音楽）表現という手段に落とし込むことは、けっして自明な連鎖ではない。敬虔（けいけん）なカトリック教徒が、必ずしもメシアン的な規模で徹底的にカトリック的な作品を書いているわけではないからだ。メシアンと同時代、あるいは少し前には、ヴィエルヌや、メシアンの師のマルセル・デュプレ、そしてモーリス・デュリュフレのように、メシアン同様にオルガニストとして活動しつつ、カトリックのために作品を書き続けた作曲家はいる。でも彼らは、よりカトリックの典礼に近いところで曲を書いていた（もちろん、それ以外の作品もあるが）。

そもそもメシアンの音楽は、カトリシズムへの帰依とはいうものの、「宗教音楽」というカテゴリーには分類しがたいものばかりである。彼の作曲においては、あくまでも典礼の外部、演奏会のための作品の表現内実としてカトリシズムが現れるだけである。ミサ曲を書くわけではない、疑似典礼的な宗教的オラトリオを書くわけでもない。大作である〈我らが主、イエス・キリストの変容〉のような作品は、一種のオラトリオと見なしてよいのかも知れないが、そこにはやはり〈トゥーランガリラ交響曲〉などに代表されるメシアン特有の強力な官能的音楽も絶えず聞こえており、宗教性のみで捉えるわけにはいかない。カトリックそのもののなかに、そうした神秘性・官能性の要素が深く潜んでいるとはいえ、

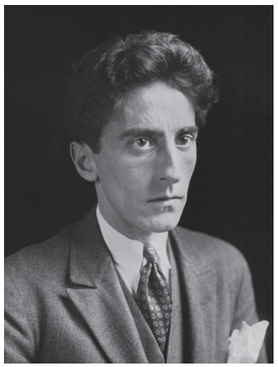

1930年のメシアン

それは西洋音楽が聖アウグスティヌスの時代から執拗に拒絶し、危険視してきた要素でもあった。メシアンは、そうした禁忌をなんの疑問もなく侵犯する。

いや、なんの疑問もなく、というのは言い過ぎかも知れない。なぜなら、メシアンの創作がはっきりとカトリシズムへの方向を決めた作品、〈忘れられた捧げもの〉が書かれた時代、すなわちメシアン自身がカトリシズムへと舵を切る1930年代は、ひとりの作曲家が生涯の方針を決める上で、さまざまな問題を抱え込んだ難しい時代だったのだから。21歳のメシアンがこの「交響的瞑想」を書いた1930年は、大恐慌の翌年。資本主義経済と旧来の市民社会が大きく揺らぎ、ヨーロッパではファシズムが台頭してくる時期である。ファシズムはなにもナチの独占物ではなく、フランスの右翼もアクシオン・フランセーズなどに代表されるように、ファシズムとナショナリズムに傾いていく。それに対して、これを危険視するいわゆる左翼運動は連帯を示しながら、1936年に人民戦線内閣を樹立する。しかしながら、それは連帯した共産主義への危惧も同時に抱いていたため、長続きせぬまま分裂していくのである。

「若きフランス」が目指したもの

フランス人民戦線が文化的にシンパシーを感じたのは、伝統的な過去との関係を断ったモダンな感覚であった。しかしながら、それは同時に社会運動を組織するためには大衆的でなければならない。モダンと大衆性、その一見矛盾した両極を体現するのは、音楽においては新古典主義を標榜するフランス6人組とそのデマゴーグであるジャン・コクトーであった。けれども、第一次世界大戦中に端を発し、フランス古典性、反ロマンティシズム、反ワーグナーを旨とする彼らのモダニズムは、メシアンのような戦後世代には、同時代の政治的左派・右派間の喧噪と同様、鬱陶しく感じられた。メシアンがアンドレ・ジョリヴェやイヴ・ボードリエなどとともに作曲家グループ「若きフランス」を組織したのは、そうした眼の前の、あるいは過去を引きずるイデオロギー的な対立とは別の、より普遍的でヒューマンな音楽を目指してのことであった。「叙情性と人間性の回帰」が彼らのマニフェストである（だから〈トゥーランガリラ交響曲〉にはトリスタン的な世界が現れる）。


ジャン・コクトー

「若きフランス」　左からアンドレ・ジョリヴェ、イヴ・ボードリエ、メシアン、ダニエル＝ルシュール

この上で、メシアンは6人組の美学を否定しつつ、同じカトリシズムでも、右派と結びつきがちの伝統性とは距離を置き、同時にガムランをはじめとするユニヴァーサルな音楽文化との接触（それを、メシアンは人民戦線下の一大ページェントとなった1937年のパリ万博で知ることになる）を介し、非西洋の音楽との並置によって独自の立場を成立させようとした。ガムランのような音楽、インドのリズム、そして典礼の外部としてのカトリシズムへの取り組みが、メシアンの手法となっていく。

こうした立場は、フランス1930年代に生じた「非順応主義」と対応するものである。既存の左でも右でもない、過去でも現代でもない、それらとは別の第三の道を見いだそうとする一派、その中心的な人物であるカトリックの哲学者エマニュエル・ムーニエの姿は、メシアンと重なる点が多い。今日誰もが疑わないメシアンの創作上のカトリシズムは、「非順応主義」の音楽的決断の一種だったと見なしてもよいかも知れない。

やがてナチ支配下のヴィシー政権で、もういちど「若きフランス」という作曲家グループがピエール・シェフェールたちによって立ち上げられたとき、ムーニエはピアニストのコルトーと並んで顧問となった。文化的組織であると同時に政治的な組織であった、この2度目の「若きフランス」は、やがてド・ゴールとの結びつきが強くなって、ヴィシー政権によって解散させられたが、そのあと多くのメンバーたちはレジスタンスへと走っていった。

（ちょうき せいじ・音楽評論家）

次回は5月号に掲載します

心に残るクラシック

猪木武徳 ——③

Takenori Inoki

「二刀流」クララ・ハスキルの面目

モーツァルト：ピアノ協奏曲第27番 K.595

好きになった曲は、最初に聴いた演奏が強く心に残るものだ。モーツァルトは幾多のピアノ協奏曲の名曲を遺したが、そのなかでどれかひとつを取るとなると、ルーマニア出身のピアニスト、クララ・ハスキルがピアノを弾いた第27番K.595ということになる。この演奏の清澄さと深さはモーツァルトのものでもあり、ハスキルのものでもあると思う。

なぜハスキルの演奏にそれほど魅せられるのか、その理由は正確に言い表せない。ただ、彼女の伝記（J. Spycket著）を読んで、その一端が分かるような気がした。ハスキルは、少女時代、ピアノもヴァイオリンも弾く両刀遣いの演奏者として知られていた。この「ヴァイオリンも弾くピアニスト」という点が、ハスキルのピアノ演奏に類のないエレガンスをもたらしているのではなかろうか。

打楽器でもあるピアノの難しさのひとつは、いかにレガートを弾きこなすかという点だろう。優れたヴァイオリニストでもあったハスキルは、ピアノでヴァイオリンのように滑らかなレガートをいかに弾くかに心血を注いだに違いない。そこにハスキルのピアノのエレガンスがあると、わたしは勝手に想像している。（ちなみに、モーツァルト自身もピアノとヴァイオリン双方の名手であった！）

ハスキルと名ヴァイオリニストのアルテュール・グリュミオーは、モーツァルトのヴァイオリン・ソナタをしばしば協演し、レコーディングも行っている。そのグリュミオー自身も、実はピアノを驚くほど巧みに弾いたという。したがって、ハスキルとグリュミオーがヴァイオリン・ソナタを協演する際は、どちらがどちらの楽器を担当するかを真剣に検討したというエピソードがまことしやかに語られるほどであった。

クララ・ハスキル（1895～1960）
©credit unknown, 写真提供：Bibliothèque cantonale et universitaire Lausanne

ハスキルはモーツァルトのピアノ協奏曲を何曲か演奏しているが、演奏回数が（特に晩年）多かったのはニ短調の第20番K.466と、変ロ長調の第27番K.595だった。このハスキルの第27番を、高校二年生の時から何度聴いたことだろう。この文章を書くにあたって、そのLPレコードを取り出してみようと自宅のライブラリーを探したのだが見つからない。最後に聴いたのはいつだったのかも思い出せない。確かフェレンツ・フリッチャイ指揮のバイエルン国立管との協演ではなかったかと記憶する。CDでもその演奏が聴けないものかと調べてみた。残念ながら、見つけることができなかった。だが、不思議とあきらめの気持ちもわく。昔あれほど感動したのだから、もう十分ではないか。それをあえて再現してみても、どうだというのだ、という説明のつかない妙なあきらめだ。

第1楽章の主題は、モーツァルトが晩年しばしば用いたフラット二つの調性の持つ、独特の透き通るような気高さだ。第2楽章の静謐（せいひつ）なラルゲット、そして歌曲〈春への憧れ〉を思い起こさせる晴朗なテーマの第3楽章。この曲は、自己の殻をどう脱ぎ捨てるのかともがいていた高校生に慰めとなるのに十分な力があった。

第27番を、ハスキルのように力強くそしてエレガントに弾いているピアニストはいるのだろうか。この自己確信と優美さは、ピアノもヴァイオリンもこなすハスキルの面目躍如たるところだと思う。弾力的な生き生きとしたリズム感は、ヨーロッパの中心部からやや離れたところに位置する国々（ルーマニア、ポーランドなど）の音楽家が持つ、生まれながら身についている音楽性なのだろう。

◎ソロ・ヴィオラ奏者

柳瀬省太

Shota Yanase

受け身ではなく
音楽を動かすパートです

≪４月から読響の創立５５周年記念のシーズンに入ります。バルトークのオペラ〈青ひげ公の城〉公演、メシアンのオペラ〈アッシジの聖フランチェスコ〉全曲日本初演など意欲的なプログラムをそろえました。そういえば柳瀬さんは、かつてドイツの歌劇場で活躍した経験がありますね≫

東京芸大を卒業後、おもに室内楽の活動をしていたのですが、文化庁の奨学金をもらって31歳でイタリアのパドヴァに留学、その後、シュトゥットガルト歌劇場管弦楽団で5年間演奏しました。カンブルランが今音楽総監督をしている歌劇場です。実は、僕の父は関西二期会のテノール歌手で、3歳のころからよく稽古場に行きました。最初に聴いたのが、ブリテンのオペラ〈小さな煙突掃除人〉。カセットテープに録音して一日中聴いていたので全部覚えました。音楽も日本語の歌詞も。そのころからオペラにはまっていました。

≪交響楽団と歌劇場のオーケストラでは、随分違いがありますね≫

シュトゥットガルトでは、本番はオペラとバレエと1週間に5日ほどでした。オペラばかりの週もあって、たとえば月曜日は〈トスカ〉、火曜日は〈フィガロ〉、水曜日はワーグナーというようなメニューです。

日本でオペラを演奏する場合、ともするとオーケストラは歌手につけて弾く感じになるけど、向こうでは専属歌手との一体感があり、アンサンブルしている感じでした。自分の都合で歌う歌手は相手にされませんでしたね。

大事なのは、歌手の言葉を聴いて演奏するということです。僕はドイツ語が得意ではなく、歌手の歌うドイツ語がすらすらと入ってこなかったのですが、ドイツ人の演奏家には、歌手のドイツ語が下手だと、「言葉がわからないから弾けない」という人もいました。日本人歌手の多くは一生懸命「歌って」いるんだけど、一生懸命「語って」いない感じがします。僕は楽器を弾く時、話すように弾くことを心がけています。一つ一つの音を活かすように努力しています。きれいに弾く、いい音を出す、だけじゃなくて。

≪オペラは演奏時間が長くて、弾くのにも体力が必要ですね≫

僕はオペラ好きなので、参考にならないかもしれません（笑）。ワーグナーは5時間弾いていてもまったくOKで、楽しい。モーツァルトのオペラでは歌手の伴奏になりがちだけど、ワーグナーはオーケストラも歌手も音楽と一緒に動きますから。

意外とオペラって弾きやすいんですよ。物語があって、このシーンはこんな場面だと分かるから、その通りに弾けばいい。楽員たちの演奏する方向性は一緒です。ところが、交響曲は抽象的で自分でイメージして弾かねばならない。皆考えていることが違うかもしれないでしょう。交響楽団がオペラを演奏することは、アンサンブルだけではなく、表現の幅も広がるという意味で絶対プラスだと思います。

≪神奈川フィルの首席を経て読響に入団、もう３年過ぎました≫

読響は明るいオケですよね。音も明るい。みんな仲がいいというか、演奏会後に三々五々よく飲みに行きますね。楽員同士の絆が深いと感じます。演奏も、けっして手を抜かず、攻めの姿勢は長所だとも思います。

≪オーケストラの中で、ヴィオラはどういう存在でしょう≫

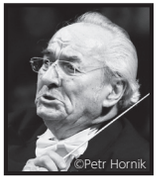
自分の性格もそうですが、目立ちたがり屋ではありません。僕は黒子として引き締める役かなと思う。他のパートが走り過ぎると、セーブする役というか。セカンド・ヴァイオリンやヴィオラといった内声部のパートは「音楽」を知っていないと務まらない。他のパートに合わせていくのではなくて、むしろ音楽を動かす立場であるべきだと思います。それには、受け身になったらいけない、意志を強く持たねばと思っています。ドヴォルザークやブラームスは、ヴィオラの使い方が上手いですよね。面白いと思うのはメロディではなくてほかの部分です。ヴィオラが動かないと動けないというところが結構あるんですよ。

オーケストラの中で、ヴィオラはなかなか聴こえないでしょう。それでいいし、それがヴィオラの本当の仕事だから。ただ、読響のヴィオラは、存在感がありますよね。ヴィオラに存在感があると、演奏の全体がびしっとするような気がします。

東欧の巨匠レナルトが久々に登場し、〈英雄〉などを指揮

5/13（土）14:00　第197回 土曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

5/14（日）14:00　第197回 日曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール



オンドレイ・レナルト

ショパン：ピアノ協奏曲 第1番
ベートーヴェン：交響曲 第3番〈英雄〉

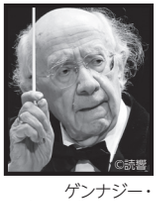
指揮：オンドレイ・レナルト
ピアノ：ケイト・リウ

※当初発表の指揮者から変更となりました。

ケイト・リウ

名誉指揮者ロジェストヴェンスキーが振るブルックナー第5番

5/19（金）19:00　第568回 定期演奏会　東京芸術劇場コンサートホール



ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー

ブルックナー：交響曲 第5番（シャルク版）

指揮：ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー（名誉指揮者）

※当初発表の指揮者から変更となりました。
※2017年度の定期演奏会はサントリーホールの改修工事に伴い、4～9月は東京芸術劇場で開催します。

“ハープの貴公子”メストレが名曲〈アランフェス〉で聴衆を魅了！

5/26（金）19:00　第602回 名曲シリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

5/27（土）14:00　第96回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ　横浜みなとみらいホール

5/28（日）15:00　第5回 パルテノン名曲シリーズ　パルテノン多摩大ホール

尾高忠明

グザヴィエ・ドゥ・メストレ

芥川也寸志：弦楽のための三楽章〈トリプティーク〉
ロドリーゴ：アランフェス協奏曲（ハープ版）
ブラームス：交響曲 第1番

指揮：尾高忠明（名誉客演指揮者）
ハープ：グザヴィエ・ドゥ・メストレ

※2017年度の名曲シリーズはサントリーホールの改修工事に伴い、4～9月は東京芸術劇場で開催します。

5月 公演の聴きどころ

5月13・14日の《マチネーシリーズ》に、名門プラハ放送響の首席指揮者を務めるスロヴァキアの巨匠**レナルト**が、プラハ国民劇場でのスメタナ〈売られた花嫁〉公演などの合間を縫って来日する。読響とは2007年以来、久々の共演で、ベートーヴェンの交響曲第3番〈英雄〉ほかを披露。東欧仕込みの温かな人間味あふれるタクトで、傑作を風格豊かに聴かせてくれるだろう。ショパンのピアノ協奏曲第1番では、2015年のショパン国際ピアノ・コンクールで第3位に入り脚光を浴びた新星**リウ**が共演。縁が深いこの曲で、甘美なメロディーをリリカルに奏でる。

19日の《定期》では、昨年9月にショスタコーヴィチの交響曲第10番などで喝采を浴びた読響名誉指揮者の**ロジェストヴェンスキー**が登場。ブルックナーの交響曲の膨大な録音を残している権威が、交響曲第5番でベテランらしい存在感を示す。マエストロの希望で、金管楽器や打楽器が増強されたシャルク版を演奏する。金管楽器による輝かしいコラールや力強く壮大なフィナーレなど、聴きどころ満載だ。実演の機会が少ないシャルク版だけに、ブルックナーを知り尽くした巨匠の深い解釈が強い関心を呼ぶだろう。

26～28日は、読響名誉客演指揮者で国際的に活躍する**尾高忠明**が登場し、ブラームスの傑作、交響曲第1番を披露する。ブラームスが最初の構想からおよそ20年をかけて完成させた苦心作でありロマン派屈指の人気交響曲を、円熟を深めたタクトで仕上げる。協奏曲では、ウィーン・フィルのソロ奏者としても活躍したハーピスト、**メストレ**が共演。ロドリーゴによるギターの名作〈アランフェス協奏曲〉をハープ版で弾きこなし、繊細な音色を駆使してスペイン情緒をカラフルに描き出す。“ハープの貴公子”と称賛される名手が繰り広げる、爽快な世界をお楽しみに。

（文責：事務局）

読響チケットWEB　検索

新鋭ブレンドゥルフが〈シェエラザード〉で描く幻想的な物語

6/11（日）14:00　第97回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ　横浜みなとみらいホール

6/13（火）19:00　第603回 名曲シリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

ダニエル・ブレンドゥルフ

シベリウス：交響詩〈トゥオネラの白鳥〉
ショスタコーヴィチ：チェロ協奏曲 第1番
リムスキー＝コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉

指揮：**ダニエル・ブレンドゥルフ**　チェロ：**宮田 大**

ウィーン国立歌劇場などで活躍する女性指揮者ヤングが初登場！

6/17（土）14:00　第198回 土曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

6/18（日）14:00　第198回 日曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

シモーネ・ヤング

ワーグナー：歌劇〈さまよえるオランダ人〉序曲
ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲 第1番
ブラームス：交響曲 第2番

指揮：**シモーネ・ヤング**　ヴァイオリン：**ネマニャ・ラドゥロヴィチ**

日下紗矢子がリーダーを務め、シューベルト〈死と乙女〉を演奏

6/19（月）19:30　第14回 読響アンサンブル・シリーズ　よみうり大手町ホール ※19:00から解説

日下紗矢子

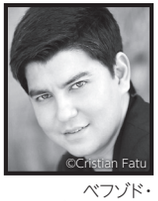
《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》
ショスタコーヴィチ（バルシャイ編）：室内交響曲 ヘ長調 作品73a
シューベルト（マーラー編）：〈死と乙女〉（弦楽合奏版）

ヴァイオリン：**日下紗矢子**（読響特別客演コンサートマスター）

アルプスの大自然の夜明けから日没までを描いた大作を披露

6/24（土）18:00　第569回 定期演奏会　東京芸術劇場コンサートホール

6/26（月）19:00　第17回 大阪定期演奏会　フェスティバルホール（大阪）



ベフゾド・アブドゥライモフ

プロコフィエフ：ピアノ協奏曲 第3番
R.シュトラウス：アルプス交響曲

指揮：**シモーネ・ヤング**　ピアノ：**ベフゾド・アブドゥライモフ**

“炎のマエストロ”小林研一郎が得意のチャイコフスキーを指揮

7/ 1（土）14:00　第199回 土曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

7/ 2（日）14:00　第199回 日曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

小林研一郎

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲
チャイコフスキー：交響曲 第3番〈ポーランド〉

指揮：**小林研一郎**（特別客演指揮者）
チェロ：**遠藤真理**（読響ソロ・チェロ）

遠藤真理

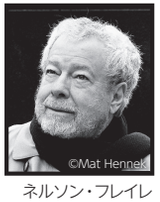
飯守泰次郎がワーグナーを振り、ピアノの巨匠フレイレが共演！

7/ 7（金）19:00　第604回 名曲シリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

飯守泰次郎

ブラームス：ピアノ協奏曲 第2番
ワーグナー：舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から第1幕への前奏曲
　　舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から“聖金曜日の音楽”
　　楽劇〈ワルキューレ〉から“ワルキューレの騎行”
　　歌劇〈タンホイザー〉序曲

指揮：**飯守泰次郎**
ピアノ：**ネルソン・フレイレ**



ネルソン・フレイレ

“古典派のスペシャリスト”が魅せるハイドン＆ベートーヴェン

7/12（水）19:00　第570回 定期演奏会　東京芸術劇場コンサートホール

鈴木秀美

ハイドン：歌劇〈真の貞節〉序曲
　　ホルン協奏曲 第1番
　　オラトリオ〈トビアの帰還〉序曲
　　トランペット協奏曲
ベートーヴェン：交響曲 第7番

指揮：**鈴木秀美**
ホルン＆トランペット：**ダヴィッド・ゲリエ**

ダヴィッド・ゲリエ

お申し込み・お問い合わせ
読響チケットセンター（10:00～18:00／年中無休）0570-00-4390（ヨミキョー）
ホームページ・アドレス http://yomikyo.or.jp/

SEKISUI presents 辻井伸行×服部百音　究極の協奏曲コンサート

■4/25（火）19:00　仙台・イズミティ21
4/26（水）18:30　盛岡・岩手県民会館
4/29（土・祝）14:00　よこすか芸術劇場
4/30（日）14:00　所沢市民文化センターミューズ アークホール
5/ 1（月）14:00　東京オペラシティ コンサートホール
5/ 2（火）19:00　東京オペラシティ コンサートホール

指揮：ニール・トムソン　ピアノ：辻井伸行　ヴァイオリン：服部百音

ショスタコーヴィチ／ヴァイオリン協奏曲 第1番　ショパン／ピアノ協奏曲 第1番 ほか

※ 料金・お問い合わせ先の詳細は、
オフィシャルサイト（http://avex.jp/classics/kyukyoku2017/）をご覧ください。

読響×アプリコ　名作オペラと幻想交響曲

■6/3（土）15:00　大田区民ホール・アプリコ

指揮：現田茂夫　ソプラノ：森麻季　バリトン：甲斐栄次郎

ビゼー／歌劇〈カルメン〉から“前奏曲”“闘牛士の歌”
プッチーニ／歌劇〈ジャンニ・スキッキ〉から“私のお父さん”
ベルリオーズ／幻想交響曲 ほか

［料金］S￥4,500　A￥3,500　25歳以下 ￥2,000
［お問い合わせ］大田区民ホールアプリコ　03-5744-1600

日本テレビ「読響シンフォニックライブ」公開収録

■6/7（水）19:00　ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮：川瀬賢太郎　ピアノ：田村響

ラフマニノフ／ピアノ協奏曲 第2番　ショスタコーヴィチ／交響曲 第12番〈1917年〉

［お問い合わせ・詳細］「読響シンフォニックライブ」ホームページ
http://www.ntv.co.jp/yomikyo
［料金］無料　［応募締切］4/27（木）当日消印有効

《グラインドボーン音楽祭との提携公演》共同制作　歌劇〈ばらの騎士〉

■7/26（水）18:00、7/27（木）14:00、7/29（土）14:00、
7/30（日）14:00　東京文化会館 大ホール

指揮：セバスティアン・ヴァイグレ　演出：リチャード・ジョーンズ
出演：林正子、妻屋秀和、小林由佳、加賀清孝、幸田浩子 ほか（26日、29日）
森谷真理、大塚博章、澤村翔子、清水勇磨、山口清子 ほか（27日、30日）

R. シュトラウス／歌劇〈ばらの騎士〉

［料金］S￥17,000　A￥14,000　B￥11,000　C￥8,000　D￥5,000　学生 ￥2,000
［お問い合わせ］二期会チケットセンター　03-3796-1831

追悼 スクロヴァチェフスキ

日本での最後の演奏会となった2016年1月23日《特別演奏会》から ©読響

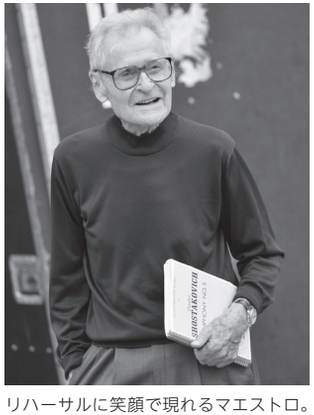
読売日本交響楽団・桂冠名誉指揮者（第8代常任指揮者）のスタニスラフ・スクロヴァチェフスキ氏が2月21日、アメリカのミネソタ州で逝去されました。93歳でした。

マエストロは1923年ポーランドのリヴォフ（現在はウクライナ）生まれ。1978年5月に読響に初登場し、2000年からは定期的に共演を重ねました。07年4月から10年3月まで第8代常任指揮者に。その間、ブルックナーの交響曲を軸として、ベートーヴェン、シューマン、ブラームス、ショスタコーヴィチ作品などで数々の名演を残し、批評家からも高い評価を受けました。2010年からは桂冠名誉指揮者として共演。来日のたびに矍鑠（かくしゃく）とした指揮姿と妥協を許さぬ音楽作りで、絶大な支持を得ました。読響との最後の演奏は、2016年1月21日と23日のブルックナーの交響曲第8番。まさに全身全霊を傾けたタクトで、万雷の拍手を浴びました。

ここに、生前の氏の多大なる貢献に対し、心から感謝を捧げ、哀悼の意を表します。

1978年6月9日、第143回《定期演奏会》（東京文化会館）より ©読響

常任指揮者としての最後の公演で、オーケストラ退場後も続くスタンディングオベーションに応える。2010年3月26日、第491回《定期演奏会》（サントリーホール）



リハーサルに笑顔で現れるマエストロ。2013年9月29日 ©読響

90歳の誕生日当日に行われた公演後のレセプションにて、息子ニコラス氏と。2013年10月3日 ©読響

2016年1月23日《特別演奏会》でのカーテンコールより ©読響